



# 注目すべき感染症

## 咽頭結膜熱

咽頭結膜熱は主にアデノウイルス3型(他に1、2、5、6型など)による、咽頭炎、結膜炎を主とする急性ウイルス性感染症である。発熱、咽頭炎(咽頭発赤、咽頭痛)、結膜炎(結膜充血、眼痛、流涙、眼脂)が3主症状であり、通常、潜伏期間が5~7日、有症状期間は3~5日とされている。感染経路は主に飛沫感染、接触感染であるが、その感染力は強力であり、患者が触れたタオル、ドアの把手、エレベーターのボタン、階段の手すりなどを介して感染する場合がある。また、症状消失後も約1カ月間に渡って尿・便中にウイルスが排泄されるとされており、さらに無症状病原体保有者も存在する。そのため、予防対策の効果的な実施が容易でなく、毎年全国的に乳幼児施設や小児施設において集団感染がみられている。

2006年は第3週以降、過去10年間と比較して最も報告の多い状態が続いている(図1)。第20週の定点当たり報告数は0.67(総報告数2,020)であり、都道府県別では鹿児島県(1.8)福井県(1.7)、香川県(1.3)、岐阜県(1.3)、福岡県(1.3)の順であるが、20週までの定点当たり累積報告数(全国平均4.04)(累積報告数22,144)では、福井県(16.3)、島根県(13.1)、岐阜県(12.7)、佐賀県(12.3)、鹿児島県(10.2)が多い(図2)。年齢別では5歳以下が全体の70%以上を占めており、7歳までが90%前後を占めているが、これは例年と同様である(図3、図4)。

2006年第1週からの分離ウイルス(総分離報告数46)では、アデノウイルス3型が46%と最多であり、次いで2型32%、1型8%、5型8%、6型4%の順となっている(図5)。今までのところ、例年半数以上を占める3型が50%を下廻っており、2型の割合が例年より増加している。

咽頭結膜熱は報告の多い状態が続いているが、今後夏季を迎えてさらに増加すると考えられるため、その発生動向には注意が必要である。

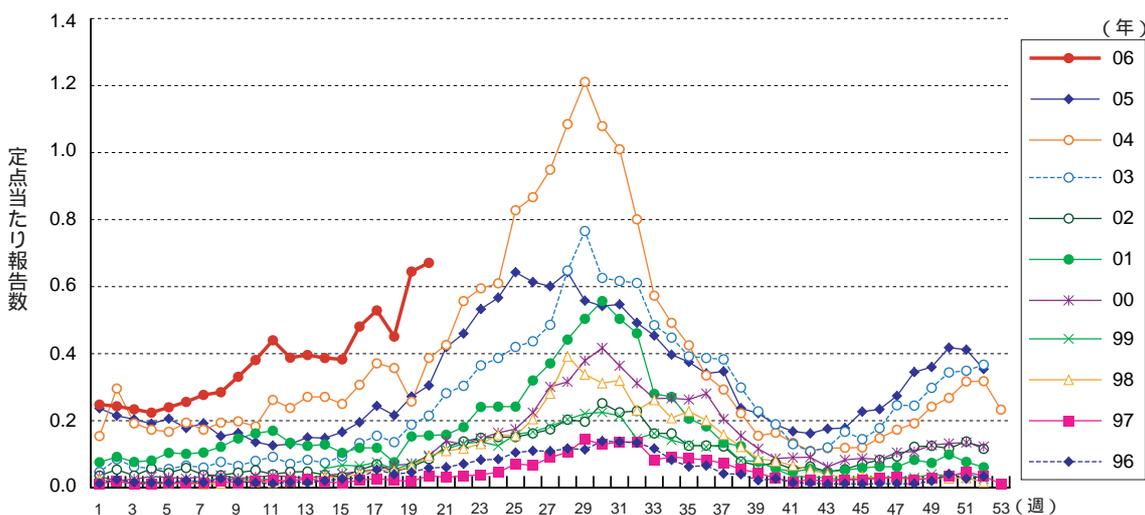


図1. 咽頭結膜熱の年別・週別発生状況(1996~2006年第20週)

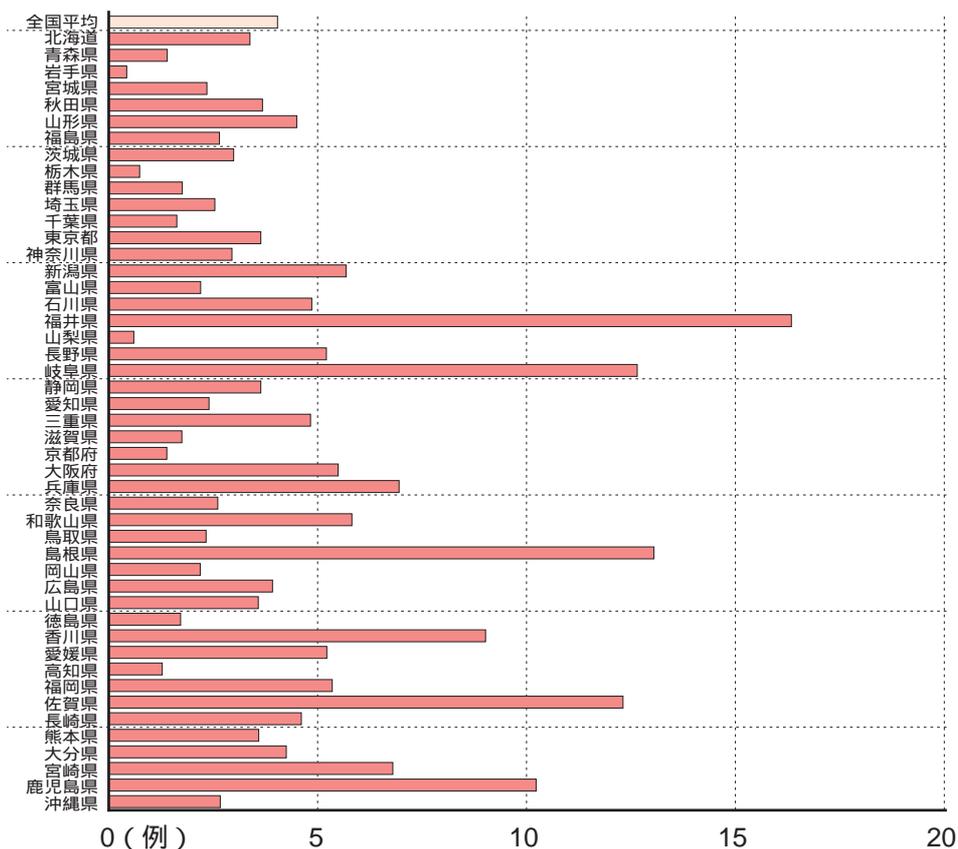


図2. 咽頭結膜熱の都道府県別報告状況(2006年1～20週)

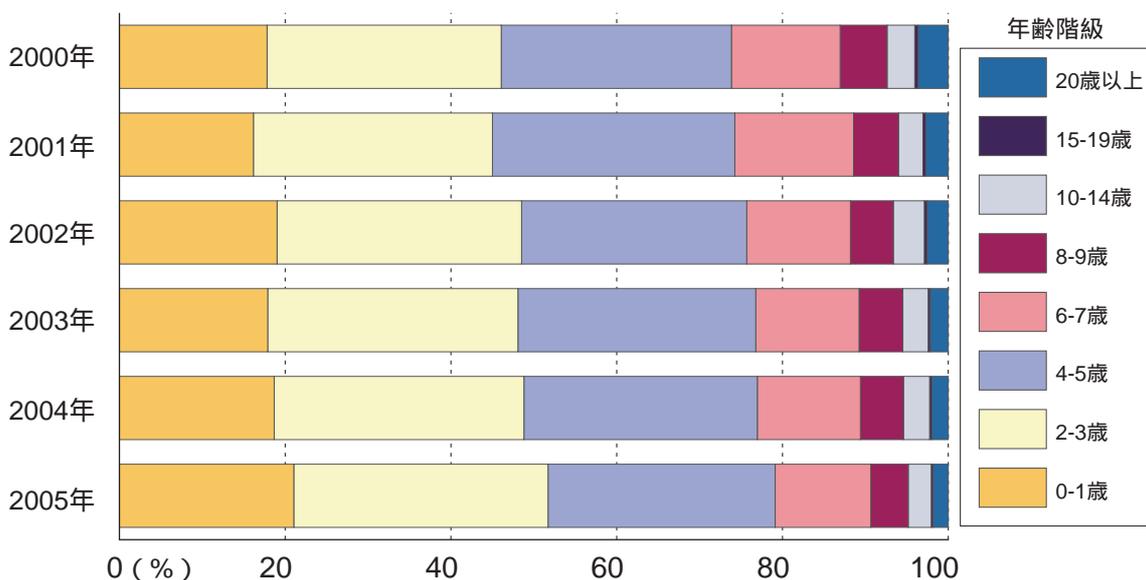


図3. 咽頭結膜熱の報告症例の年別・年齢階級別割合(2000～2005年)

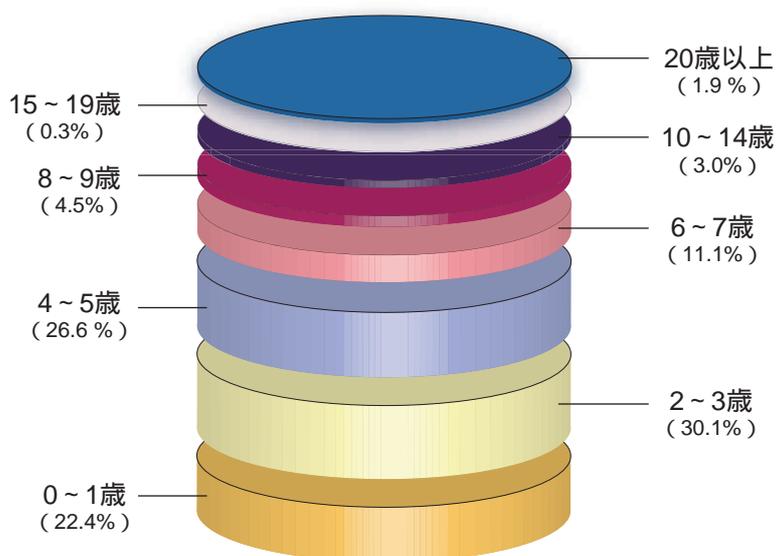


図4. 咽頭結膜熱の報告症例の年齢群別割合(2006年第1～20週)

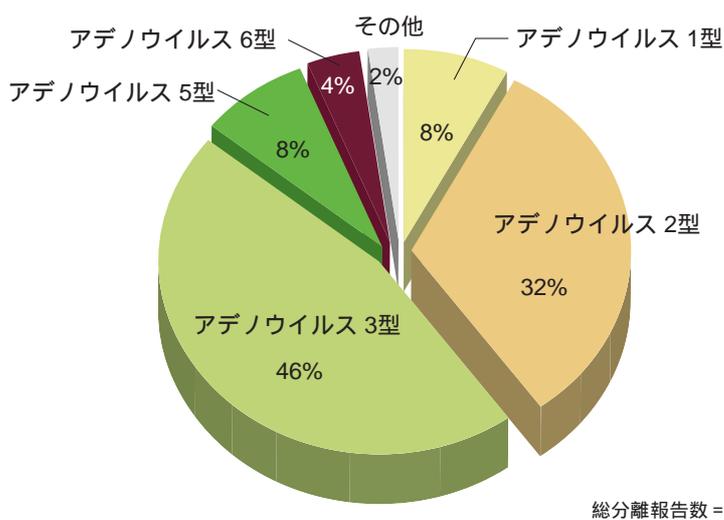


図5. 2006年の咽頭結膜熱における分離ウイルス(2006年5月15日現在)